

Title	The Princess Casamassima における曖昧性の意味
Author(s)	好井, 千代
Citation	Osaka Literary Review. 25 p.55-p.66
Issue Date	1986-12-20
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25515
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

The Princess Casamassima に おける曖昧性の意味

好井千代

I

本稿は、Henry James の *The Princess Casamassima* (1886) における曖昧性の問題について考察する試みである。だが、この試みは、二重の意味において、一見不適切に思われるかもしれない。

第一に、この作品は、James が Emile Zola を中心とするフランス自然主義に最も近づいた時期に書かれた、Zola 流の社会的側面に重点を置く決定論的な直接描写が顕著な作品であり、そのような曖昧性の度合いが弱い作品を曖昧性についての考察の対象とすることの不適切さである。しかし、この作品の筋において大きな役割を果たすべき Diedrich Hoffendahl 指揮下の革命運動が Zola 流の直接描写で充填されず、曖昧なまま放置され、意味の真空空間ともいうべきものを形成していることは既に指摘されている。Peter Brooks は、Hoffendahl 率いる革命運動を “all the evacuated centers of meaning” を表わす “abyss” として捉え、¹⁾ 同様に William W. Stowe も、革命運動の実像の捉え難さ、その “central, knowable meaning”²⁾ の欠如を強調している。もっとも、革命運動の曖昧性を指摘する Brooks も Stowe も、革命運動と曖昧性の結びつきについては格別の意味を読み取ろうとはしていない。

だが、本稿で留意したいのは、この作品が曖昧性をはらんでいるということもさることながら、その曖昧性が革命運動という一種の権力機構と結びついているということである。とはいっても、Irving Howe のような否定的な見解は取るつもりはない。確かに、Howe が述べているように、革命運動の曖昧性は James の革命運動に関する知識の不充分さに起因するも

のであり、Jamesは当時の実際の特定の革命運動を提示できていないかもしれないが、³⁾ その代わりにその結果として、Jamesは極めて現代的な権力機構を革命運動という形を借りて提示できたのではないだろうか。そして、それは曖昧であることで権力主体に権力を行使させるような逆説的な権力機構ではないだろうか。

しかし、このように、社会的な側面に主眼を置く Zola 流の直接描写を免れている曖昧な革命運動を社会的な側面から捉え返し、その曖昧性を社会的な側面から明確に定義しようとする試みは、曖昧性の捉え方において、*The Princess Casamassima* を考察の対象とすることと同様、不適切に思われるかもしれない。なぜなら、言語の本質を“undecidability”とみなす考え方が主流になりつつある今、曖昧性はいわば理論的必然性として容認されているが、このような考え方の根本には、曖昧性を非社会的なもの、社会的な諸々の力に対立し対抗しうるものとして、戦略的に利用しようとする姿勢があるように思われるからである。文学作品の概念の“work”から“text”への移行を宣言した Roland Barthes は、“text”の特質の一つとして“plurality of meaning, an *irreducible* plurality”⁴⁾を挙げ、このような“text”は常に字義通り“paradoxical”⁵⁾、ドクサ（通常臆見と訳されているが、Barthesはここでは社会通念の意味で使っている）を超えるものであるとしている。つまり、意味の複数性は、“the rules of enunciation (rationality, readability, and so on)”⁶⁾を通してイデオロギーとして作用する社会通念を超え出てこれを打破するための対抗手段と考えられているのである。

だが、他ならぬこの意味の複数性、曖昧性がある種の社会的な力作用、例えば権力に逆用されることもあるのではないだろうか。John Carlos Rowe は、*The Turn of the Screw* 論において、登場人物の家庭教師の雇い主に曖昧性を利用する権力者の姿をみているが、⁷⁾ 曖昧性もまた社会的な力作用を被りうるのではないだろうか。このように考えると、曖昧性を非社会的なものとして容認することの方が不適切に思われてくる。曖昧性

の積極的な容認は、曖昧性を利用する権力の無批判的な容認につながりかねないからである。このような逆説的な権力には、曖昧性を用いる戦略は通用しないといえよう。必要なのは、曖昧性を社会的な側面から問題視し、曖昧性と権力の共犯関係を暴き出すことである。本稿は、*The Princess Casamassima* に出てくる Hoffendahl とその革命運動についてその作業を行う。Hoffendahl が *The Turn of the Screw* の雇い主と同様 曖昧性を利用することは Rowe も指摘しているが、⁸⁾ *The Princess Casamassima* 論では、Rowe の関心はもっぱら Fredric Jameson 流のマルクス主義的文学批評にあり、Hoffendahl についても“reification”を中心としたマルクス主義的側面からの見解が主で、Hoffendahl と曖昧性の関わりには明確な言及がなされておらず、Hoffendahl と *The Turn of the Screw* の雇い主との類似性の軽い指摘にどどまっている。本稿では、Hoffendahl 率いる革命運動の曖昧性を特に言語の“undecidability”との類似性に着目して考察してゆきたいと思う。

II

Hoffendahl は革命運動の指導者であり、革命運動における全ての指導権を手中に納めている。彼は革命運動という権力機構を通じて権力を行使する権力主体であり、“a man who was the very incarnation of a strong plan” (VI, p. 47)⁹⁾ と述べられているように、彼の権力主体としての基盤は革命運動という“a strong plan”であるといえる。だが、Hoffendahl が計画し組織立てる革命運動は、その実像が定かではなく——従って革命運動を自己の権力基盤とする Hoffendahl も不在の存在となっている—、直接的に描写されることがない。前述の通り、革命運動の曖昧性は既に指摘されているが、Hoffendahl の権力が それを通じて行使されるところの革命運動が曖昧であるとはどういうことなのか。権力基盤を曖昧にすることで、権力を行使するなどということがありうるのであろうか。もし、ありうるとするならば、そのような権力行使はどのようにしてなされる

のか。

Howe は、先にも述べたように、革命運動の曖昧性を作品構成上の欠陥とみなしているが、その際留保を設けている。

Remarkable as was James's insight into political personality, I think it reasonable to say that it does not quite come to a commanding vision of the political life. James showed himself to be brilliantly gifted at entering the behavior of political people, but he had no larger view of politics as a collective mode of action. He had a sense of the revolutionaries but not of the revolutionary movement.... He made the mistake of supposing that the whole was equal to a sum of its parts: that if you exhausted the radicals you had gotten at radicalism.¹⁰⁾

Howe は、革命運動自体の実体のなさを批判する一方、革命運動に参加し革命運動を荷っている個々人の民衆が生彩を放っていることは認めている。確かに、漠然とした革命運動そのものに比べて、革命運動に携わる個人はかなり生彩のあるものだといえる。主人公の Hyacinth Robinson はいうまでもなく、理想主義的社会主義者でフランスからの亡命者 Eustache Poupin にしろ、Hyacinth の冷静沈着な友人 Paul Muniment にしろ、それ相応の個性的な色づけが施されている。このような個性的な個人を幾人連ねても全体としての革命運動を描いたことにはならないというのが Howe の意見であるが、Hoffendahl 率いる革命運動において問題なのは、革命運動そのものの全体的な客観性ではなく、むしろ革命運動に携わる個人の存在ではないだろうか。革命運動が漠然としているのとは対照的に個人が相応の個性を持っているのは、革命運動がそれ自体としては革命運動としての実体がなく、革命運動の荷い手である個人個人の人間との関わりにおいてのみ存在しうるものであるからではないか。

革命運動はいわば絨毯の下絵である。Wolfgang Iser は、James の *The Figure in the Carpet* (1896) において絨毯の下絵に例えられている Vereker の小説を単一の意味で埋められることのない “an empty space”¹¹⁾ であり、

小説の意味は読者との“interaction”¹²⁾の中に捉えられるべきであると述べて、このテキストの特質にテキスト一般の特質をみているが、革命運動についても同様のことがいえる。Hoffendahl によって厳密綿密に練り上げられた革命運動の計画は、それ自体では単一の意味を提示するだけの客観性を持たない。それは様々に読み取られることが可能な単なるボタンに過ぎない。このボタンを読み取り具体的な意味づけをなすのが、革命運動の荷い手としての個々人の民衆であり、民衆にはそれ自体空白なページに過ぎない革命運動に主体的な意味づけを施す読者の役割が振り当てられているのだ。革命運動の個人レベルの推進者達が *The Princess Casamassima* の中で前景化されて描写されているのは、革命運動というテキストに対する民衆という読者の立場の主体性と積極性のためであると考えることができる。

このように、革命運動とその推進者である民衆の関わりは、テキストと読者の関わりとの類似性において考察できるが、ここでわざわざテキストと読者の問題を持ち出したのにはそれなりの理由がある。革命運動の計画が指令という形によって個々人の民衆に告げられる時、革命運動は、まさに、テキストとして現われるのだ。次に、具体的な例に沿って、革命運動のテキスト性についてみてゆくことにしよう。

The Princess Casamassima において、Hoffendahl から革命運動の参加者に指令が下ったことがはっきりしているのは一度だけである。物語の後半部分、それも終わりに近い部分で、主人公 Hyacinth Robinson に下る指令がそれである。ここで何よりも注目したいのは、Hoffendahl からの指令が“letter”という形をとって Hyacinth に下ることである。“letter”，それはつまり手紙であり、文字であり、手紙という文字のテキストである。この“letter”という形をとる革命運動についての指令は、Hoffendahl から直接 Hyacinth に手渡されるのではなく、見知らぬ革命運動の同志から Hyacinth の知人で同志でもある Schinkel を通じて Hyacinth の許へ伝達される。見知らぬ同志はまるで“a good postman on his rounds”

(VI, p. 380) のような様子をしており、他の同志達への Hoffendahl の指令を運んでいることが予想される。そのように考えるならば、Hoffendahl は Hyacinth に限らず およそ 革命運動の 荷い手達に “letter” の形で指令を下しているのだといえる。換言すれば、革命運動の荷い手達は、“letter” として提示される革命運動についての指示を読む読み手の立場に立たされているのである。

さて、Hyacinth に下された指令はいかなるものであったのか。指令の具体的な内容については、直接的な言及は一切なされていない。Brooks が述べているように、指令の内容は、Paul Muniment や Schinkel の推論や Hyacinth の自殺などから断片的につきはぎするしかなく、¹³⁾ 指令の正確な内容がはっきりと表面化するということはない。

だが、指令は、そもそも客観的な内容など持っていないのではないだろうか。指令が書かれてある “letter” は、そもそも “a blank”¹⁴⁾ なのではないか。Schinkel が Hoffendahl からの指令を Hyacinth に手渡す時に述べる “it’s probably nothing...” (VI, p. 381) という言葉は、指令の空白性を示唆するものであろう。この空白性において、指令はまさしくテキストとしての性格を帯びる。テキストの特質が空白であることは、*The Turn of the Screw* 論で幽霊が文字言語と類似している根拠として “self-negation” を挙げる Shoshana Felman の説に如実に示されている。

Nothing, nobody; no-thing, no-body: marked by the very sign of negation and denial, prefixed by a “no” which bars them in the very act of calling them up, the ghosts — like the letters — manifest themselves only to negate themselves, but through this self-negation, carry out their own self-affirmation; their mode of being and of self-manifestation is that of their own contradiction.¹⁵⁾

指令は “nothing” としてそれ自体は客観的な内容を持たない。指令の意味はそれ自体にあるのではなく、指令の受け手との関わりにおいて生じてくるのだ。Hyacinth が指令を読んだ時の flash back による描写部分を

みてみよう。Hyacinth が指令を読む直接描写による場面は脱落しているからだ。

... everything else of his past had been engulfed in the abyss that opened before him when, after his separation from Mr. Vetch, he stood under the lamp in the paltry Westminster street. That had swallowed up all familiar feelings, and yet out of the ruin had sprung the impulse of which this vigil was the result. (VI, p. 396)

この部分でも指令の内容はそっくり脱け落ちていく。代わりにここで描写されているのは、指令の Hyacinth への作用であり、指令を読む Hyacinth 側の反応である。指令が告げられるのは、その確固たる客観性においてではなく、その読み手に対する作用においてである。Hyacinth がいかに反応するか、指令をいかなる意味のものとして受け取るかが問題なのだ。それ自体 “nothing” である指令というテキストは、読者の Hyacinth との関わりによって、Hyacinth の読み行為によって存在するのであり、指令の意味は読み手の読み行為の中で生成されるのである。つまり、指令の意味は “an object to be defined” ではなく、“an effect to be experienced”¹⁶⁾ なのである。

このように、指令は本来空白であり、その意味は客体としてではなく作用としてしか存在しない。Hoffendahl は、まさに、指令のこのようなテキスト的な性格を利用して権力を行使しているのである。Hoffendahl の権力は極めてテキスト的な働き方をする。ということは、曖昧性、空白性によって働く権力であるということだ。従属する者達の主体性を何よりも重んじる無力な権力であるということだ。“... who's Hoffendahl and what authority has he got?” と尋ねる Madame Poupin に向かって答える Eustache Poupin の “He has no authority but what we give him. ...” (VI, p. 371) という言葉は、権力が支配下の者達に従属させる時の無力さと支配下の者達が権力に従属する時の主体性という極めて逆説的な権力行使の図式を端的に指示している。

だが、本当に Hoffendahl の権力は無力なものであろうか。これまでは Hoffendahl の権力行使のテキスト性に着目して話を進めてきたが、果たして Hoffendahl の権力はテキスト性の利用という側面からだけで割り切れるようなものなのであろうか。

III

確かに、Hyacinth は Hoffendahl からの指令をいかようにも解釈してよいテキストとして受け取る。指令がいかようにも解釈されうるとは、確固たる意味を受け手に押しつける強制的な力を持たないということである。指令の仲介者である Schinkel は Hyacinth に “Certainly there’s no compulsion . . .” (VI, p. 371) と語り、また Paul Muniment は Princess Casamassima に Hyacinth に下った指令について “If he doesn’t like it he needn’t do it.” (VI, p. 416) と述べ、共に指令には何ら強制力のないことを指摘している。

しかしながら、それとは全く正反対のことを Hyacinth と Schinkel は互いに取り交わす言葉の中で確認しあう。“If you hadn’t done your job you’d had paid for it.” と述べる Hyacinth に、Schinkel は “And if you don’t do yours so will you.” (VI, p. 384) と切り返す。指令はいかようにも解釈できるようでありながら、実際は唯一つの解釈しかできないのだ。そして、その唯一つの解釈をしない者は報いを受けなければならない。報いを受けることは承知しながらもその唯一つの解釈を拒もうとした Hyacinth は、死に追い込まれて自らの命を絶つ。指令は様々な解釈を招き寄せる空白を装いながら、その実唯一つの解釈しか許さず、その唯一つの解釈をしない者を死に至らしめるほど絶大な強制力を備えているのである。

このように、指令が個人に要請するのは、主体的な関与ではなく、その逆のこと、非主体的で盲目的な服従である。個々人の民衆が主体的であるのは、みせかけに過ぎない。彼らは、実は、強制的な指令を発する Hoffendahl の意のままに操られる操り人形なのである。彼らが Hoffendahl のい

かに強力な権力の支配下に置かれているかは、Hoffendahl を中心とする革命運動の中枢部の者達についての Schinkel の言葉からも明らかであろう。

“They know everything — everything. They’re like the great God of the believers: they’re searchers of hearts; and not only of hearts, but of all a man’s life — his days, his nights, his spoken, his unspoken words. Oh they go deep and they go straight!” (VI, p. 383)

このように考えるならば、Hoffendahl は、曖昧性によってしか権力を行使しえないような無力な権力主体ではない。Hoffendahl は、さながら“the great God of the believers”のような一種超越的で絶対的な権力者の立場に身を置いている。Mark SeltzerがHoffendahlをリアリズム小説における全知の語り手に例えているのも、無理からぬことであろう。¹⁷⁾

無力な権力は実は絶大な権力であり、個人の主体的な参加は実は盲目的な従属でしかない。Hoffendahlの権力は、建前は個人の自由な意志を尊重するが、実際は個人の自由の余地を残さない強制力を持った二重底の権力であるのだ。故に、Hoffendahlの利用する曖昧性は非常に欺瞞的である。自己の絶大な権力を掌握しつつそれを否定するというHoffendahlの巧みな操作によって、曖昧性はHoffendahlの権力を支配下の者達の主体的な隷属化という形でよりスムーズに行使させる有力な方策となり、彼の絶大な権力を絶大なものと思わせないトリックとなってしまっている。そして、これまで考察してきたように、この曖昧性はテキスト的なものである。だから、対極にあるはずの絶対性のカムフラージュであるテキスト性というものもありうるのだ。言語の、そして言語から構成される文学テキストの本質として曖昧性を必然的なものであると考えることは、この種のテキスト的な欺瞞性を見逃し、この種のテキスト的な曖昧性を操って権力を行使する権力主体の存在を結果的には容認してしまうことになるのではないだろうか。確かに、テキストは本質的に曖昧なものであろう。だ

が、そのようなテキストの本質が意図的に利用されるということもありうるのだ。

IV

これまで度々指摘されてきたように、James の作品が曖昧性を包含し曖昧性を核としていることは否定しえない事実である。Tzvetan Todorov は、極めて明快な調子で、James の作品の “logical origin and reason of being” は “the absence of the cause or of the truth”¹⁸⁾ であると述べている。

では、この真の意味の “absence”，曖昧性は James の作品の中でどのように処理されているのか。Todorov は、“absence” に対する James の相異なった二つの姿勢を指摘している。

On one hand he deploys all his forces to attain the hidden essence, to reveal the secret object; on the other, he constantly postpones, protects the revelation — until the story's end, if not beyond.¹⁹⁾

James は曖昧性を維持しつつ、曖昧性を縮小させるため全力を尽くす。James は曖昧性を容認しながらも、曖昧性を必然的なものとして放置することができない。Todorov は James のこの相矛盾した態度を中立的な立場から述べているが、Brooks は曖昧性の縮少という点に James の基本的な態度をみており、曖昧性を積極的に容認する Gustave Flaubert とは対極の位置に James を置いている。²⁰⁾ Brooks は曖昧性の縮少手段として James の作品のメロドラマ性を挙げているが、現象学的観点を取る Paul B. Armstrong もまた point of view の技法を曖昧性克服の手段と考えており、Brooks とは基本的には同じ立場に立っている。²¹⁾

本稿も、Brooks や Armstrong 同様、James の基本路線は曖昧性克服だと考える立場に立っている。だが、両者のように、James のこの曖昧性克服の態度の中に究極的な意味の模索という保守的な方向性を読み取るつもりはない。確かに、James の曖昧性に対するこのような消極的、否定的

な態度は保守的であり、特権的な意味の存在の可能性を捨て切れない証しであると解することもできよう。しかし、見方を変えるならば、曖昧性を全面的に肯定しないということは、特権的な意味の代わりに曖昧性そのものを特権的な地位に祭り上げないということであり、曖昧性自体の特権性、必然性に対する不信の表われであるということが出来る。Jamesの作品において、曖昧性はしばしばいかがわしさと結びつき、解明されねばならない問題性をはらんでいる。本稿では *The Princess Casamassima* を例に取って、曖昧性が常に必然的であるとは限らず権力によってさえ故意に操作されうるものであることを考察してきたが、このようにJamesは曖昧性そのものを問題化することで、曖昧性を一概に中立的なものとして決めつけることへの警告を発したことになるのではないだろうか。

注

- 1) Peter Brooks, *The Melodramatic Imagination: Balzac, Henry James, Melodrama, and the Mode of Excess* (New Haven: Yale University Press, 1976), p. 173.
- 2) William W. Stowe, *Balzac, James, and the Realistic Novel* (New Jersey: Princeton University Press, 1983), p. 89.
- 3) Irving Howe, "Henry James: The Political Vocation," in *Politics and the Novel* (New York: Horizon Press, 1957), p. 146. これに対して、Lionel Trilling や Oscar Cargill は革命運動に当時の地下活動との著しい類似性を見出し、革命運動の曖昧性は否定している。Lionel Trilling, "The Princess Casamassima," in *The Liberal Imagination: Essays on Literature and Society* (1949; rpt. London: Secker and Warburg, 1955), pp. 68-74. Oscar Cargill, *The Novels of Henry James* (New York: Macmillan Company, 1961), pp. 151-153.
- 4) Roland Barthes, "From Work to Text," trans. Josué V. Harari, in *Textual Strategies: Perspectives in Post-Structuralist Criticism*, ed. Josué V. Harari (1979; rpt. New York: Cornell University Press, 1984), p. 76.
- 5) Barthes, p. 75.
- 6) Barthes, p. 75.
- 7) John Carlos Rowe, *The Theoretical Dimensions of Henry James* (Wisconsin: The University of Wisconsin Press, 1984), pp. 120-146.

- 8) Rowe, p. 182.
- 9) 作品からの引用は, Henry James, *The Princess Casamassima*, New York Edition, Vols. V-VI (1908; rpt. New York: Charles Scribner's Sons, 1936) による。以下, 巻数と頁数のみを引用文末尾の括弧内に記す。
- 10) Howe, pp. 149-150.
- 11) Wolfgang Iser, *The Act of Reading: A Theory of Aesthetic Response* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1978), p. 8.
- 12) Iser, p. 9.
- 13) Brooks, p. 173.
- 14) Brooks, p. 173.
- 15) Shoshana Felman, "Turing the Screw of Interpretation," *Yale French Studies*, 55/56 (1977), 150.
- 16) Iser, p. 10.
- 17) Mark Seltzer, *Henry James & the Art of Power* (Ithaca and London: Cornell University Press, 1984), p. 54.
- 18) Tzvetan Todorov, "The Secret of Narrative," in *The Poetics of Prose*, trans. Richard Howard (Ithaca, N. Y.: Cornell University Press, 1977), p. 145.
- 19) Todorov, p. 145.
- 20) Brooks, pp. 198-199.
- 21) Paul B. Armstrong, *The Phenomenology of Henry James* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1983), pp. 210-211.